



坂本美紗希（さかもと・みさき）は1990年長野生まれ、2014年武蔵野美術大学工芸工業デザイン学科テキスタイル専攻を卒業、初個展がステップスギャラリーである。グループ展の経験もあろうが、略歴に記されていない。坂本は綿布、綿オーガンジー、綿糸、反応染料、顔料を素材とし、筆描き染め、刺繍を技法とした《by your side》シリーズの20×20×3cmの作品を16点、15×15×3cmの作品を15点、アクセサリーを数点、発表した。このような情報がなければ、綿布にアクリルで描かれている抽象作品との違いは全く分からない。明るい色彩で余白を多く取った、上品な絵画である。糸が垂れている様はコラージュによるものかとさえ思ってしまう。抽象的なイラストも存在はするが、イラストレーションが持つ固さに比べて、坂本の作品は明らかに絵画的性が強い。色彩の使い方もイラストと絵画を隔てる場合があるが、坂本の作品は独得の色合いを醸し出している。描かれていない部分の生地の色合いや、「塗る」のではなく「染める」感触は、確かに絵画の技法では実現できない世界観である。

側面までたっぷり描かれているというよりも、描かれてからパネル張りを施したのであろう。ここもまた、画面に固執する絵画と面を自由に展開するテキスタイルの違いの意識が浮彫になっているということが出来るのであろう。画面がスクエアであることも、成功している。絵画であれば限定されるが、テキスタイルの世界では、より自由な広がりを携えることが可能となる。それは号=面積で考えるのではなく、包み込む印象が強くなるからであろう。バウハウスを例に出すまでもなく、現代美術の思想の領域では従来の素材や技法を乗り越え、これまでに存在しなかった、全く別の世界を目指すことが定説となっている。そのように考えると、坂本の作品が何かを問う意味はない。重要なのは、そのような坂本の作品を我々がどのように捉えるかにある。坂本の作品から晦渋な思想を見出す必要もないし、単に可愛らしく明るいただけであると限定することも出来ない。逆に染織の可能性を引き出し、見出すこともできる。手触りという生活が基盤となるとも考えられる。我々は未知の作品に対して考え続けなければならない。

